

光と影、移ろう時、
その象徴として
花がぴったりなんです。

——美浪恵利



光にとけてく 2008年 50号F アクリル
第44回昭和会展昭和会賞受賞作品

みなみ・えり

1982年徳島県生まれ。2005年徳島大学総合科学部人間社会学科（マルチメディアコース絵画表現研究室）卒業。第59回二紀展初入選、以降毎年出品（09年二紀賞受賞）。06年第16回花の大賞展、現代美術インディペンデントCASO展2006、07年第26回損保ジャパン美術財団選抜奨励展推薦出品。08年昭和会展出品、翌年同展昭和会賞受賞。現在、兵庫県西宮市在住

新しいセンスを感じ、「いいですねー」
受賞の前年、すてに見出されていたその才能

松村 あなたが1回目に出した作品（昭和会賞を獲得前年・第43回展出品作）を買いました。審査の会場で山本先生に「受賞はしなかったが、彼女には非常に才能がある」と言われてその場に行き、改めて見てみると、新しいセンスを感じる絵だった。「いいですねー」と言うと、「いいでしょ」と山本先生がおっしゃって、「買いましょう」となりました。

美浪 これまでにも知人や友人が買ってくれた事はありませんが、企画画廊さんで値段をつけていただき、それを人を買っていただいたというのはあの絵が初めてなんです。ほんとうに嬉しくて、嬉しくて……。

——松村社長は翌年、さらに昭和会賞受賞作も購入されて。

松村 そう、それで受賞作とその前の年の作品を比べたら、1年間で劇的に変化していたのが面白いと思った。

——そうやって楽しめるのは、コレクションしている方ならではの特権ですね。

山本 松村さんには、若い作家を押し出さうとする気持ちがあります。ですから、薦めたかきがありました。誰かがきちんと認めてくれていることを実感することで、若手はグッと伸びていくものですから。

松村 才能ある若手を陽のあたる場所に連れ出して自信をつけさせてやりたいという



第44回昭和会展昭和会賞受賞作品《光にとけてく》の前で。右から美術評論家・南島宏、作家美浪恵利、ブリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・松村謙三、洋画家・山本貞、日動画廊専務取締役・長谷川暁子の各氏

新連載 巨匠への第一歩

撮影：船寄剛 本文構成：丸山かおり

昭和会展・最新世代の魅力——①

第44回昭和会賞 美浪恵利

「巨匠への第一歩」といわれる「昭和会展」、その最新世代をクローズアップした8月号、9月号の座談会の好評を受け、今月からは連載として新たにスタート！近年の受賞者たちの制作のヒミツに迫っていきます。

今回のゲストは第44回（平成21年度）昭和会展で昭和会賞に輝いた美浪恵利。出産前後に制作、受賞を果たし、以降、子育てと制作活動の両立のために先輩作家や画廊、愛好家から受けた叱咤激励や有形無形の支援……。若き女性作家必読のエピソードの数々を。

【ホスト】

松村謙三（ブリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター招聘教授）

南島宏（美術評論家・女子美術大学教授）

山本貞（洋画家・日本芸術院会員）

長谷川暁子（日動画廊専務取締役）

受賞する前から、

新しいセンスを感じさせる作品でした。——松村謙三



まつむら・けんぞう
ブリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役社長。他に大阪大学 法科大学院招聘教授、大阪大学 知的財産センター招聘教授、経済同友会金融市場委員会委員も。来年、「松村謙三美術館」を清里にオープン予定

山本先生の気持ちは、素晴らしいと思います。とは言え、先生に薦められたからと言っても買わないものは、買いません（笑）。

——その線引きの基準って何なんですか？
南 作品を買う理由は言葉で表現できるものではないでしょう。絵そのものに惹かれるかどうか。

じゃあ美浪さんの作品の魅力は何か、と言えば、花の美しさを描いているけれど、写真的でもなく映像的でもない——つまり表層的な美しさではない、もっと先の魔的なところにまで迫るような、画家のきわめて根源的な自己証明をしている作品だ、ということだと思いますね。「自分がここに存在し、生きていく」という姿勢、これが作品として昇華されているかが、画家の一番大切な仕事だと思います。
松村 そう、花を描いているんだけど、表現しているものが別のものなんだ。

南 輪郭がぼけているのは、曖昧な表現ということではなくて、世界との距離感をクリアに捉えようとしているからでしょう。だからこそ花が咲く時の、内包するエネルギーが抑えきれずに開く、あのエロティックな生命感を画面に定着できているんだと思います。

美浪 ありがとうございます……。おっしゃった通り、学生の頃から自分の存在証明として描いている意識はずっとあります。家の庭には花がいつも咲いていて、うちの中にもいつも花が飾られていましたので、花を描く事は私にとっても自然なことでもあるんです。

エロティックという指摘は、実は少し意外なのですが、花を選んだ時点でそういった意味合いが入るのは自然なことだと思います。花は「パワー」が混じっていくことで開花するエネルギー体というか、そんなイメージなんです。水を吸いあげているだけに、キュッと締まった固いつぼみがワアッと開花する。そして散っていく。その部分だけでもドラマチックで、本当に生命力を象徴するような存在だと思っ

ているんです。
山本 エロティックで生命力あふれる作品の女性の画家といえば、オキーフ【※1】などが代表格だけど、たしかにちよつと通じるものがあるよ

がなくって、温みや優しさ、やわらかさが融合してきましたね。絵には不思議と内面が表れるし、女性自身が変わっていくものだから。

「母子の健康と稀有な才能を潰さない！」 育児と制作の両立へ、願いを込めた嘆願書

——女性自身が変わっていく、ということでは、美浪さんの受賞作の制作当時、身重なからだに制作されていたそうですね。

美浪 そうなんです！ まさに妊娠中だったので制作の際はかなり負担があったのですが、（所属する二紀会の理事長である）山本先生をはじめ審査員の先生方に、前年度（第43回展）出品後にシード作家に選んでいただいたので「とにかくもう一度、昭和会展に出さなければ！」という一心で描いたんです。

朝と夜の間 2005年 122×162cm アクリル
大学卒業時に制作し、二紀展に初入選した作品。「徳島大学在学中に師事しておりました、二紀会所属の平木美鶴先生のすすめで出品しました。初めて画面を2枚構成にして描いてみた作品です（作家）」



やまもと・てい

洋画家。現在、日本芸術院会員、二紀会理事長、日本美術家連盟常任理事。1934年東京都生まれ。58年武蔵野美術学校卒業。72年の第8回昭和会展での優秀賞作家でもある



——審査の際、「子育てにエネルギーをとられなくていいですね。」
美浪 （長谷川）暁子さんに強烈な叱咤激励を受けて。「やっぱりがんばろう」と考え直したんです。

美浪 役所に嘆願書まで出していたら！
一同 嘆願書!!
長谷川 若い画家は所得が不安定だし給与明細

山本 二紀展とはまた違う場、他流試合でもっとも鍛えてほしかったんです。昭和会展は所属団体を問わないから、クロスオーバーできる場だからね。それに、受賞できなかった前年だけの出品で終わってほしくないという気持ちもありました。

美浪 20代、一人の作家として芽が出るためには、「今しかない！」「もうこれが最後の挑戦だ」と。死ぬ気で頑張る機会と考えたんです。今は制作も子育てもそれぞれ100パーセントの力でやりたいと思いますが、その時は、全力で描いた後は、しばらくは子育てモードにシフトして制作は細々としようか、とか思っただけに死に物狂いで描きました。

——受賞はまさにそんな心意気のままのだったんですね。その後は子育てモードどころか、個展を中心に戻す制作ペースが充実していつていますね。

美浪 役所に嘆願書まで出していたら！
一同 嘆願書!!
長谷川 若い画家は所得が不安定だし給与明細

誰かが認めてくれることで、 若手はグツと伸びる。

山本貞

白ばらのいざない 2007年 50号M アクリル
第43回昭和会展出品作。受賞はしなかったもののその才能を認めた松村氏が購入、作家にとって初めてコレクションされた作品となった



【※1】 ジョージア・オキーフ (1887～1986) はアメリカの女性画家。花や骨などモチーフに抽象性を秘めた具象作品で知られる。代表作に《黒いアイリスⅢ》(1926) など。
【※2】 エドワード・ホッパー (1882～1967) はアメリカの画家。20世紀アメリカの具象絵画を代表する一人。代表作に《線路脇の家》(1925) 《ナイト・ホークス》(1942) など。

なんかないわけです。だから一般に職業として認められにくくて、保育園からも「制作といつても家にいるんだから」とばかりに入園を断られてしまうケースがほとんどなんです。だから「絵描きこそが保育園に子どもを預けなければいけない」という旨の嘆願書を市役所にあてて書いたんです。

画家は、パレットナイフやシンナーなど危険物をたくさん扱わなければいけません。それを傍に置きながらの子育てがいかに難しいか。しかも、美浪さんは制作と子育ての両立のために西宮と、実家の徳島との往復も強いられていた。その精神的、肉体的負担は尋常ではありません。ですので、受賞した昭和会展のカタログを添えて、「母子の健康と、将来有望な作家の稀有な才能を潰すおつもりですか!？」と。

美浪 お蔭様で、その後すぐに入園できました。

南嵐 さすがですね、長谷川さん(笑)。

松村 政治家になれるね(笑)。

山本 (笑)でも、女性が制作する難しさをこれほど親身に理解してくれる画廊とめぐりあえたことはありがたいことです。若いお母さん同士の共感があった。しかも、昭和会がきっかけとなって松村さんのような慧眼を持った応援者とのご縁も早くから持てた。こうしたこと全

てが、非常に幸運なことです。
美浪 はい、本当に……。

「これが最後の作品になるかもしれない……」
全力の制作が、真剣なまなざしに訴えかける

——受賞者を画廊や愛好家が総合的に支えていくスタイルは、『文藝春秋』が主催する芥川賞にも似ていますね。

山本 昭和会展が他のコンクールと違って半世紀にもわたって続いてこれているのは、画廊と愛好家が若手作家を支えるという基礎がきちんとしているから。おかげでずいぶん若い才能がのびのびと制作できるようになった。

——かつておおいに注目された安井賞も、画廊や愛好家の方々と距離が必ずしも近かったわけではない。やがて当初の力を失ってしまい、若い作家がなかなか制作を継続できなかった過去もあります。そうしたことを鑑みていかに昭和会が有意義な賞か、と思いますね。

松村 新人時代は収入面でも不安ですし、アフターケアしないとすぐに枯れちゃいますよ。47年前に長谷川(徳七・日動画廊代表)さんが、当時にすれば大変な金額をもって賞をスタートさせて、しかも賞を獲って終わりではなくて、

花の美しさを描きつつも、もっと魔的で

根源的なところへ迫った作品です。——南嵐 宏



南嵐 僕もいちばん最初に自分の文章を評価してくれて、執筆を依頼してくれた人のことは一生忘れませんね。美浪さんも最初に作品を購入した人のことを忘れないでほしいな。

美浪 もちろんです!

南嵐 あと、これは私見ですけど、松村さんは若いアーティストたちに向かって、「自分を信じて、全力で戦い続ける」というメッセージを送っているんだと思うんです。ご本人は照れて認めないかもしれないけど、昭和会展の審査中に作品購入を決められる時など、単にコレクターという以上の真剣な想いを感じます。

松村社長のような実業家、というより人生は、巷でよくあるような何歳まではこうやって過ごして、老後はこう過ごして、というようなことをしていたら、決して実現しない生き方なんです。その瞬間、その瞬間ごとを全力で突っ走る。それはアーティストたちの人生と非常に近い。

——だからこそ、作家の今の全力が注がれている作品に共感されるのかもしれないですね。

美浪 ……私の父は、中学生の頃に倒れて一週

日動画廊が個展やグループ展などを通してきちんと応援してきた。これは素晴らしい功績だと思います。

私は、来年、清里駅前にオープンさせる「KENZO 松村美術館」で松村謙三賞、昭和会賞などの受賞作品を一年間、美術館に展示することにしています。また過去六年間は、昭和会展の各受賞作品を私個人で買上げてきましたが、来年からは、「KENZO 松村美術館」が買上げます。若手の作品が受賞すれば、いきなり美術館の買上げ作品になるわけです。受賞のバリューが格段に上がるのではないかと考えています。

山本 若い作家たちにはとても嬉しいことです。ただ収蔵されるだけでなく、多くの人々の目に触れるわけですから。

松村 これから内装をリニューアルした後、5000坪の敷地があるので、本格的な新館を建設する計画です。

——作品をいちはやくコレクションしてもらえて、さらに美術館にも展示される。これ以上の励みはないでしょうね。



みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ

間後に亡くなっているんですが、以来「人はいつ死ぬかわかんから、この絵が最後になるかもしれない」、絵を描きながら、知らず知らずのうちにそんなことを考えていますね。

南嵐 作家であることは、職業ではなくて、生き方を選んだということ。刺し違えてでも何かを得ようとする作業でしょう。命を差し出してでも、次の命を——そういう意味では、女性の原理に非常に近い営みだという気がします。

長谷川 そうかもしれませんね。女は子供によって次の世代をつくるけれど、作家にとっても作品は子どものようなものでしょう。しかも、それは次の世代に留まらず、はるかな時を越えていくものでもありうる。それを生み出せる作家の仕事というのは、本当に尊い仕事だと思います。

——松村社長が最初の出品作を購入されたことが、美浪作品がはるかな時を越えるはじめの一歩、というわけですね。

美浪 そうなるよう頑張ります……。そもそも、何十年も絵を描き続けてきた私にとって描かないことのほうが不自然だと思ってきたのですが、コレクションしていただいたことで「お金を出していただいて、作品を納めるんだ」というプレ意識が芽生えたというか。より高いレベルで描かなければ、常に挑戦者としていなければ、と思うようになりました。これからも見守っていただけましたら嬉しいです。



はせがわ・あきこ
日動画廊専務取締役。聖心女子大学で美術史を専攻後、ニューヨーククリスチーズ研修生、ニューヨークメトロポリタン美術館(20世紀部門)勤務、日動画廊本社営業部勤務を経て、現職。東京都生まれ

さらさら〜 PEARL RIVER〜 2012年 130号F アクリル
第66回二紀展(開催中〜10月29日/国立新美術館) 出品作
「桜はずっと好きな木でしたがあの美しさを描くにはまだまだ技量が足りないと思っていました。でも震災後、日本人が愛するこの花を描かなければいけない、と思いました。亡くなった方々への鎮魂の想いと、この悲しみを乗り越えて生きていくわたし日本人全てに向けて……3ヶ月間、自分の命を削って描ききりました。完成した時には涙が出ました。私の桜、第1号の作品です(作家)」

育児との両立のためにも、私たちが
ケアをしなければ、と。——長谷川 暁子